



「とうろう」左から俵奏喜久ひで。本條秀太郎、本條秀慈郎（岡部好撮影）

長唄の枠超えた音楽創造

俵奏樂は、本條秀太郎が本各地に伝わる民謡を掘り楽器としての三味線の可能起し、曲に取り入れる新たな追求することにも、曰く、長唄の枠にはまらない

三味線音楽として創造している。全曲を作、編曲して洗練された新たな息吹で聴かせ、懐かしさと新鮮さが心地よい。

「雨の月」（作詞ふじ・なみ女）。優雅な旋律から始まった。大胡弓と低音三味線、陰囃子が効果的にあしらわれ、民謡力かりとでもいおうか、鹿児島島のハイヤ節が新濁に伝わり変化した《おけさ》の節を取り入れた変調が面白い。唄・俵奏勢ひで他、三味線・本條秀五郎也。

女心を唄う「とうろう」は熊本のヨへホ節を取り入れている。民謡はもともと地方で生まれた盆踊りや労働の歌だが、やがてお座敷小唄としても流行した。

「花の江島」は大奥女中の絵島と歌舞伎役者生島の恋愛事件。江戸中を騒がせさまざまに芸能化され地方でも唄われた。伊豆大島の

江島節と信濃に伝わる絵島節を用いて情感豊かに聴かせる。唄・満留ひで他、三味線・秀邦也。陰囃子入り。そして泉鏡花の作品を基にした竹田真砂子作詞の「草迷宮」は唄・三味線秀太郎、低音三味線・大胡弓秀慈郎、囃子望月太意之助他で静謐な世界を奏でる。

「椿慕情」（作詞・猿若清方）。島唄の味わいで女心を、椿のひとつらの花香りが匂いたつ榮芝ひで

の唄はさすがだ。舞踊曲「女人角田」は人の音声や爪弾きとバチの奏法を使い分けるなど多彩な音色を用いて隅田川を巡る女たちを描く。

「系歌留多」は、干支の猪をイメージした曲。秀太郎はまるで三味線と戯れているようだ。さまざまな手の妙技に聞き入った。

（梅左・芸能評論家）

7月21日、東京・紀尾井ホール